

学習指導案 教材全体の解説

1 教材名

沖縄平和学習 事前学習映像教材

本教材は、沖縄への修学旅行や平和学習に向けた事前学習教材として、全 5 編および総集編から構成されている。映像視聴によって歴史的背景や基本的な事実を知るだけでなく、映像から生まれた気づきや疑問を探究ワークにつなげ、自分なりの問いや視点を持って沖縄を訪れることを目的としている。

さらに、現地学習、事後学習へと問いをつなぐことで、平和学習を一回の映像視聴や見学で終わらせず、一連の探究学習として展開することを目指している。

2 対象

高校生を主な対象とする。学校や学年、生徒の既習事項に応じて、中学生への活用も可能である。

3 教材の構成

本教材は、全 5 編および総集編から構成する。各編では、沖縄戦そのものだけでなく、その背景となった戦争の歴史、沖縄戦における住民や兵士の状況、戦後の米軍統治、日本復帰、基地と沖縄社会、現在へと続く歴史について扱う。総集編では、それらを一連の流れとして捉えられるよう構成している。

学校の授業時数や学習目的に応じて、次のように柔軟に活用することができる。

- ・総集編を中心に全体像を学ぶ
- ・各編を個別に視聴してテーマを深める
- ・映像と探究ワークを組み合わせる
- ・現地学習の訪問先と関連する編を重点的に扱う

4 教材設定の理由

探究型平和学習教材 全体の考え方

沖縄への修学旅行における平和学習では、戦跡や資料館を訪れ、語り部や現地の人々の話を聞く機会が多い。しかし、十分な事前学習がないまま現地を訪れると、そこで得た情報が個々の出来事として受け取られ、「見た」「聞いた」「悲しかった」という体験や感想にとどまってしまう場合がある。

沖縄戦がなぜ起きたのか。なぜ沖縄が戦場となったのか。そこで住民や兵士はどのような状況に置かれたのか。戦争が終わったあと、沖縄はどのような歴史をたどったのか。そして、その歴史は現在の沖縄とどのようにつながっているのか。こうした歴史的な流れを事前に知ること、現地で見る場所や聞く話の意味は大きく変わる。

本教材では、沖縄戦を単独の出来事として学ぶのではなく、昭和期に続いた戦争の流れの中に位置づけ、戦争の始まりから沖縄戦、戦後、現在までを一続きの歴史として捉えることを重視する。

「知ること」から「問うこと」へ

本教材の目的は、出来事や年号を網羅的に記憶することではない。映像には、歴史的な出来事だけでなく、数字、写真、証言、場所、人々の選択や行動など、さまざまな情報が含まれている。

同じ映像を見ても、生徒によって気になる部分は異なる。ある生徒は数字に注目し、ある生徒は証言に心を動かされ、別の生徒は場所や人々の行動に疑問を持つかもしれない。その違いを大切にし、「なぜだろう」「どうしてこのようなことが起きたのだろう」「この人はどのような気持ちだったのだろう」「現在はどうなっているのだろう」「実際に沖縄で確かめてみたい」という問いへとつなげていく。

本教材では、次の学習の流れを基本とする。

知る → 感じる・気づく → 考える → 問う → 現地で確かめる → もう一度考える

5 事前学習→現地学習→事後学習の接続

本教材は、事前学習、修学旅行での現地学習、事後学習を一連の探究としてつなぐための教材として位置づける。

事前学習

映像や資料から、沖縄の歴史や現在について知る。その中から、気になったこと、疑問に思ったこと、もっと知りたいこと、現地で確かめたいことを見つけ、自分なりの問いや視点を持つ。

現地学習

事前学習で持った問いや視点をもとに、資料館や戦跡を見たり、街を歩いたり、証言を聞いたり、地域の人と話したりする。「自分の問いに関係するものはないか」「事前に考えていたことと実際の沖縄は同じだろうか」という視点を持って現地を見る。

事後学習

現地で得た情報や体験を、事前に持っていた問いと比較する。何が分かったか、考えがどう変わったか、まだ分からないことは何か、新たにどのような問いが生まれたかを整理する。必要に応じて、振り返り支援ツール「壁打ち君」を活用し、自分の経験や考えを言語化する。

6 教材全体の目標

知識 技能

沖縄戦を、その前後の歴史を含めて捉え、戦争の始まりから沖縄戦、戦後、現在までの基本的な歴史の流れを理解する。

思考 判断 表現

映像、写真、証言、数字、場所などの情報から、自分が関心を持ったことや疑問を見つけ、その背景や意味について考え、自分なりの問いとして表現する。

主体的に学習に取り組む態度

沖縄の歴史や現在を自分とは関係のない出来事として捉えるのではなく、修学旅行での現地学習を意識しながら、自分なりの問題意識や視点を持つとする。

7 教材活用において重視する平和学習における 4 つの視点

本教材では、特定の政治的立場に偏ることなく、中立的な視点を大切にしながら、平和学習を次の 4 つの方向へ深めていくことを重視する。

① 主体的探究：「感じる平和学習」から「自ら問う平和学習」へ

戦争の悲惨さを知り、感じることは平和学習の重要な出発点である。その気づきから、「なぜこのようなことが起きたのか」「なぜその判断が行われたのか」「自分は何をもっと知りたいのか」と問いを持つことを重視する。資料や証言をもとに、生徒自身が問いをつくる学習へと発展させる。

② 構造的視点：「出来事を知る平和学習」から「つながりを考える平和学習」へ

戦争の始まり、沖縄戦、米軍統治、日本復帰、現在の沖縄という歴史的なつながりを考える。さらに、政治、軍事、社会、経済、環境、人々の暮らしなど、複数の側面から沖縄を見ることで、一つの出来事の背後にある社会の仕組みや歴史的背景について考える。

③ 自己との接続：「知ること」から「関わりを考えること」へ

「自分だったらどう考えるか」「自分の日常とどこでつながっているか」「自分たちはどのような社会をつくっていきたいか」という問いへとつなげる。平和を自分たちが考え、対話し、つくり続けていくものとして捉える学習を目指す。

④ 葛藤への対峙：「単純な善悪」から「複数の立場」を考える学習へ

戦争や基地をめぐる問題には、簡単に一つの答えを出すことができないものも多い。当時の住民、日本兵、米兵、軍の指揮官など、それぞれの立場によって見えていた状況や選択肢は異なる。現在の沖縄をめぐる問題についても、安全、生活、経済、環境、地域社会など複数の価値や立場が関係している。

「なぜその立場を取るのか」「どのような背景があるのか」「異なる価値が衝突したとき、何が起きるのか」を考える学習を重視する。

8 探究ワークの位置づけ

各映像には、必要に応じて探究ワークや発展探究ワークを組み合わせることができる。探究ワークでは、映像で得た情報を材料として、数字、証言、写真や場所、人の立場から考える活動や、異なる資料を比較し、問いをつくる活動を行う。

基本的には、次の流れを取り入れる。

自分で考える → グループで共有する → 他者の考えを聞く → もう一度自分で考える

他者の意見を聞くことによって、自分一人では気づかなかった視点や考え方に触れ、自分の考えを広げたり修正したりすることを重視する。

9 教員の役割

教員の主な役割は、生徒が映像や資料から自分なりの視点を見つけることを支援することである。特に、次のような問い返しを行う。

- ・どこが気になった？
- ・なぜそう思った？
- ・その数字から何が考えられる？
- ・別の立場から見るとどうだろう？
- ・現地では何を見れば確かめられるだろう？

生徒が問いをつくれないうちには、数字、証言、写真、場所、人、立場、変化、原因、現在とのつながりなど、考えるための視点を示す。生徒自身が考えるための足場をつくることが重要である。

10 指導上の留意事項

- ・歴史用語や年号の暗記を中心とした学習にしない。
- ・映像中のすべての情報を書き取らせず、映像そのものを見る時間を確保する。
- ・生徒の感じ方や疑問には違いがあることを前提とし、「正しい感想」「正しい問い」を求めすぎない。
- ・戦争被害や証言を扱う際には、生徒の心理的な負担にも配慮する。
- ・沖縄戦だけで学習を終わらせず、戦後から現在までの歴史とのつながりを扱う。
- ・異なる立場を扱う際には、それぞれの背景や理由を考えさせる。
- ・現在の基地をめぐる問題についても、歴史的背景や地域社会の多様な立場を理解するための問いにつなげる。

11 想定される生徒の問い

- ・なぜ沖縄が戦場になったのだろう。
- ・なぜ多くの住民が戦争に巻き込まれたのだろう。
- ・当時の住民は、どのような情報を知ることができたのだろう。
- ・日本兵と沖縄の住民の関係はどのようなものだったのだろう。
- ・米兵は沖縄戦をどのように捉えていたのだろう。
- ・沖縄戦を経験した人たちは、現在の高校生に何を伝えたいのだろう。
- ・なぜ戦争が終わったあとも沖縄は米軍の統治下に置かれたのだろう。
- ・なぜ沖縄に多くの米軍基地が置かれることになったのだろう。
- ・基地のある地域で生活している人たちは、基地をどのように捉えているのだろう。
- ・実際に戦跡を訪れると、映像や写真で見る場合と何が違うのだろう。
- ・沖縄戦の歴史は、現在の沖縄にどのようにつながっているのだろう。

12 探究型平和学習の到達イメージ

生徒の学びを次のような深まりとして捉える。

ステップ 1 気づく

映像や写真、証言、資料から、印象に残ったことや気になったことを見つける。

ステップ 2 理解する

何が起きたのか、その背景には何があったのかを理解する。

ステップ 3 問う

「なぜ」「どのように」「本当にそうなのか」と、自分なりの問いを持つ。

ステップ 4 多面的に考える

複数の資料や異なる立場を比較し、一つの出来事を複数の視点から考える。

ステップ 5 自分の考えを形成する

学習や現地での体験をもとに、自分自身の考え方や平和についての捉え方を見直し、自分なりの考えを形成する。

この段階は、生徒が「感じる・気づく → 知る・理解する → 問いを持つ → 多面的に考える → 自分の考えを形成する」という方向へ、どのように学びを深めているかを捉えるための目安として活用する。

13 教材全体として目指す学び

本教材で最も重視するのは、生徒が映像を見終わったときに、沖縄戦について知ることに加え、自分なりの問いや視点を持って沖縄を訪れることである。

- ・なぜこうなったのだろう。
- ・この人はどのように感じていたのだろう。
- ・実際の場所を見てみたい。
- ・現地の人に聞いてみたい。
- ・自分が考えていることは、本当にそうなのだろうか。

現地で実際の場所、人、資料、証言に出会うことによって、事前に持っていた問いが深まり、変化し、新しい問いが生まれる。その問いを事後学習で再び考える。

事前に知る・問う → 現地で見る・聞く・確かめる → 事後に振り返る・問い直す

この循環を通して、事前学習・現地学習・事後学習をつなぐ探究型平和学習を目指す。

14 探究ワーク・発展探究ワーク 指導案および生徒用ワークシート

1. 全教材共通 映像振り返り教員向けサポート資料。生徒用ワークシート付
2. 事後学習探究ワーク(50分)
3. 第1編 沖縄戦の基礎知識:探究ワーク(25分)・発展探究ワーク1・2(各25分)
4. 第2編 アジア太平洋戦争の基礎知識:探究ワーク1・2(各25分)・発展探究ワーク(50分)
5. 第3編 基地問題の基礎知識:探究ワーク1・2(各25分)
6. 第4編 ベトナム戦争と沖縄:探究ワーク(25分)
7. 第5編 戦後沖縄の苦難:探究ワーク(25分)

各教材は指導案3ページ・生徒用ワークシート1ページで構成。生徒用ワークシートは必要に応じてコピーしてお使いください。